

# シェアハウスを利用した若者に 対するアンケート・インタビュー調査 (概要版)



**Co Work A**

# 調査の目的

- ① サンカクシャの生活支援を利用している受益者像の明確化
- ② 生活支援が受益者に提供している価値
- ③ 生活支援を提供していく上で必要な機能
- ④ 生活支援を社会の中に広めるための課題の整理

# 24歳男性インタビューより

「この先どうしようと悶々としていた。人に頼むということは弱いことだと思っていた。」

「大学4年の最後くらいに、（恥ずかしいんですけど）カウンセラーに話をしに行った。

それ以外は悲しいくらいつながりはなかった。他に頼った場所は、カウンセラー以外には思い当たらなかった。」

# 20歳男性インタビューより

「親のしつけが厳しく、親がしばいてくる時は平手だったのが、親が年老いて、力もなくなってきてからは木刀に変わった。」

「大学に入学し、取りたかった資格を取ってからは行く必要を感じなくなった。」

「親に言っても辞めさせてくれないので、親のサインを友達に書いてもらい、ハンコも勝手に押してやめた」

「大学を辞めてからお金をためてすぐに家を出た。」

「頼れる大人や支援者はいなかった」

# 24歳男性インタビューより

「高校卒業後は、母親が祖父母とも仲悪くなり、家が嫌になってしまい家出して、博多で3か月ほどホームレスをしていた。

23歳になるまで各地を転々としていた」

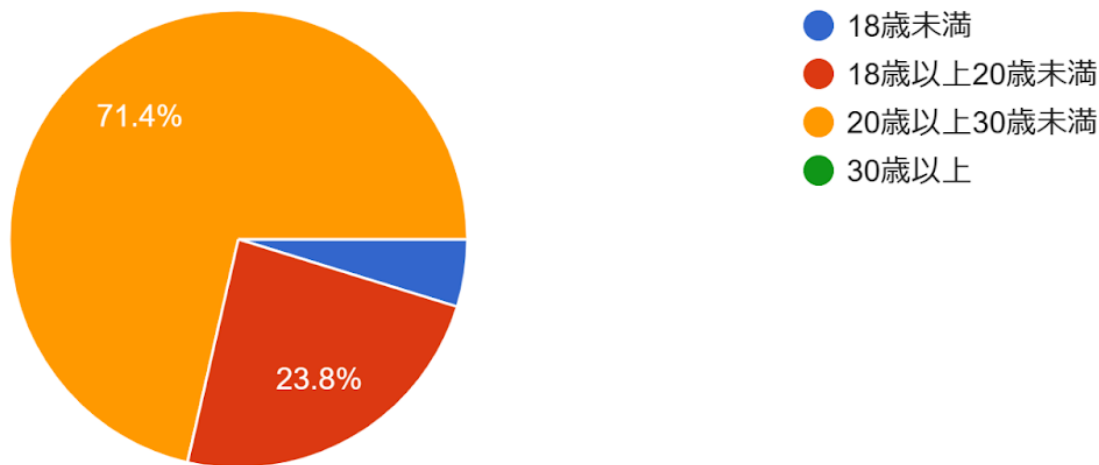
「（自分のことを）どこにも相談したことはない。転々としていた期間中、寮・食事付きの仕事などをしてお金をためていたし、糖分仕事が無くても大丈夫だった」

「以前はいろんなところを見てみたいという気持ちが強かったが、最近はそう思わない。身体がしんどいから（笑）」

# 回答者の約7割が20代、それ以外は20歳未満 男性回答者がほとんど（約9割）

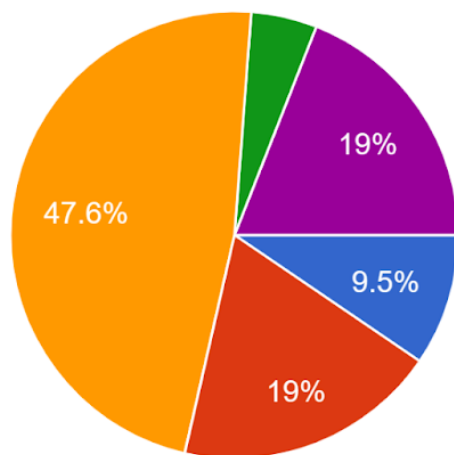
あなたの年齢として当てはまるものを一つお選びください。

21件の回答



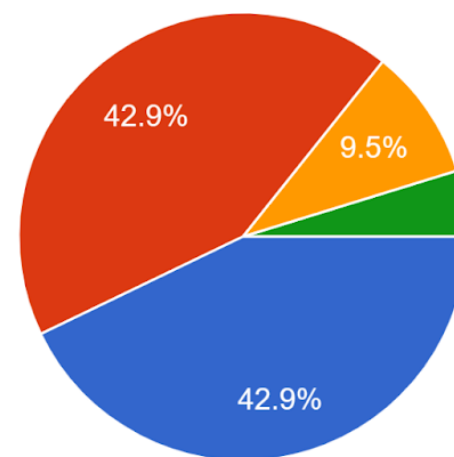
# 約半数は高卒および大学生 利用している時点で未就労の回答者も半数

最終学歴（在学中含む）



- 中学校卒業
- 高校中退
- 高校卒業
- 専門学校・大学・大学院中退
- 専門学校・大学・大学院卒

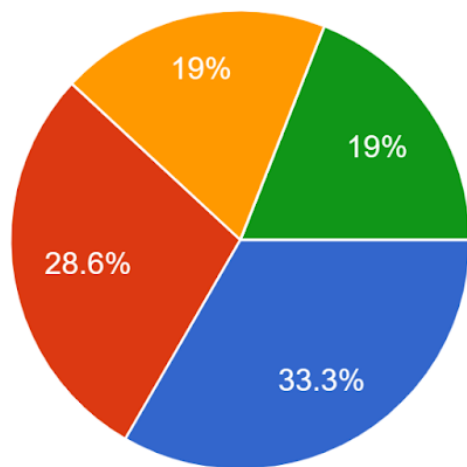
就労状況



- 現在働いている
- 現在働いていないが、過去に働いたことがある
- 今まで働いたことはない
- 学生

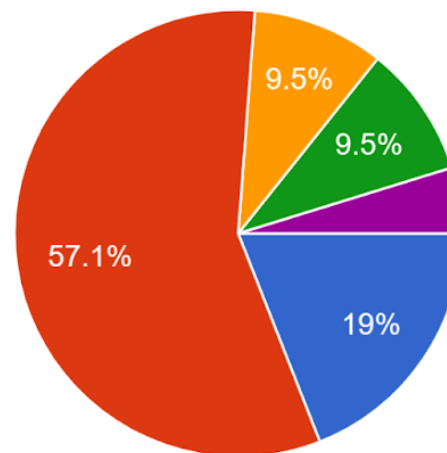
# 平均的な入居期間は約半年。概ね満足いただいているが、不満はプライバシー関連

利用期間



- 3カ月未満
- 3カ月以上6ヶ月未満
- 6ヶ月以上1年未満
- 1年以上3年未満
- 3年以上

利用の満足度

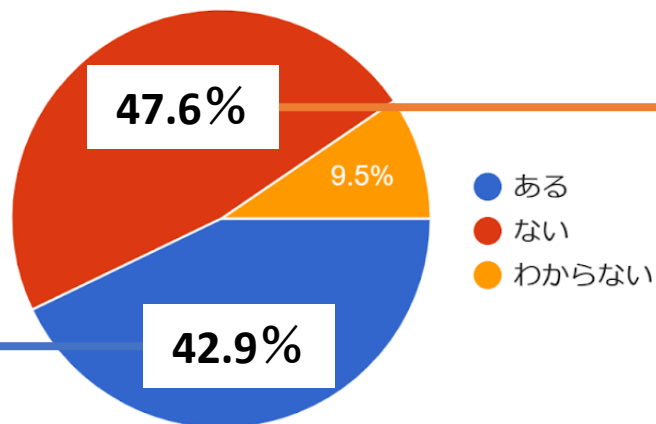


- 非常に満足している
- まあ満足している
- どちらともいえない
- 少し不満を感じている
- とても不満



# 約半数は行政と繋がっていない。 1/3の若者が行政の支援を知らないと回答。

サンカクシャとつながる前に行政支援につながっていたところはあるか



## サンカクシャとつながる前に利用したことのあるサービス (N=21)

- 行政の相談窓口：47.6%
- 行政の補助金・生活保護制度：19%
- 行政の就労支援・学習支援等：19%
- 非営利組織の就労支援：4.8%
- 民間企業が提供するシェアハウス：14.3%

## 行政と繋がったことがない理由 (N=10)

- どこに相談したらいいかわからなかった：60%
- 何を相談すればいいかわからなかった：30%
- 相談したくなかった：20%

# 調査結果から得られる示唆 サンカクシャの生活支援の受益者像

## ✓ 家族関係に困難を抱えている若者が多い

保護者の不和、離婚。虐待経験。保護者自身が障がいを抱えているケース。  
家族・自宅が居場所にならないがゆえに家出→孤立

## ✓ 大人への不信感

家族との関係構築のつまずき。学校の教職員等、家族以外の大人への不信感も。  
家族や学校といった子ども・若者時代に時間を過ごした環境で大人への信頼関係をつくれず、社会に出た後もその評価を他の大人に投影してしまう。

## ✓ 社会との繋がり脆弱さ

行政や地域との繋がり弱さ。自発的に繋がることを回避している若者は一部であり、大部分は「知らない」「理解してもらえない」と思っていない

## ✓ 自立した生活、就労への意識

「ちゃんとした生活を送りたい」「働きたい」という意思表示をする若者の多さ

# 調査結果から得られる示唆 生活支援が提供している価値

## ✓安定した生活リズムの構築

「昼夜逆転の生活から、朝起きる生活を送れるようになった」「ちゃんと食事を取るようになった（自炊するようになった）」「掃除をするようになった」

## ✓同年代の若者と知り合う機会

「周りに同じ年とか下の人とか、幅広い年代の人とつながるといふか知り合いといふかそういうことはなかったのて、いい刺激」

「対人関係で歳上を関わることができ、緊張はしてたけど、それなりに関わると楽しい、いい刺激になっている」

## ✓大人（スタッフ）に対する信頼感の醸成

支援スタッフ・・・困ったことがあった場合に手を差し伸べてくれる、自分の知らない領域の情報や知識を提供してくれる、関係機関に同行してくれる

# 調査結果から得られる示唆 生活支援に求められる機能

## ✓ アクセシビリティ

情報アクセシビリティ（支援・活動を知ってもらうための情報チャネル）。

一方向の情報発信ではなく、双方向のやり取りが可能な方法を選ぶことが重要。

## ✓ 居住空間と食事

基本的な生存欲求を満たす機能。生活基盤の脆弱な若者にとっての価値は非常に大きい。

## ✓ スタッフの存在

支援者であると同時に最も身近で親身になってくれる大人

## ✓ 居住者間の関係調整機能

同居人との人間関係、ライフスタイルの違いに起因するコンフリクトの解消

シェアハウス全体のルールや合意形成

## ✓ 社会・地域への接点づくり、同行

生活支援は若者のニーズを把握できる。受援力の低い若者が社会に繋がるうえで同行支援が重要